

The Lyfe of Ipomydon の校訂

——写本の場合と初期印刷本の場合と——

池 上 忠 弘

The Lyfe of Ipomydon の校訂本を、Seijo English Monograph series で1983年と1985年に2冊刊行した。作品は15世紀後半に筆写された中英語(Middle English) ロマンズである。第1冊は写本に基き、第2冊は初期印刷本に基いて作った校訂本である。この2冊の本文を見較べるとすぐ気付くことであるが、両者がきわめて密接な関係にある本文であることが分かる。最近の研究で Wynkyn de Worde が印刷本を作るにあたって、この写本を printer あるいは compositor が印刷の setting-copy として使ったことが実証されている¹⁾。第2冊を刊行した第一の理由はそこにある。

目下 computer を利用して作った concordance をもとに、写本の本文と de Worde 印刷本の本文とを対照した variant readings のリスト、グロサリー、注釈などの作成を準備中であるが、この二つの editions 作成に当って筆者が考えたことおよび中英語テキスト校訂の理論と実践を、この機会に研究の記録として記述しておきたいと思う。これが本論の主たる目的である²⁾。

I 研究対象の原資料

中世英文学の作品を読む場合、評価の高い良質の校訂印刷本を使用するのが普通である。しかしその原典は中世に筆写された写本あるいは初期印刷本にある。従って作品の校訂者の扱い方によって、同一作品でもいろいろの校訂本が生まれてくる³⁾。

筆者の写本研究は、当初写本そのものの研究というよりは、第一番の

原資料である写本を通して中英語の作品をできるだけ正しく読み、そして中英語文学をよりよく理解し再考しようとする目的からはじまった。中英語ロマンスは100篇以上の韻文作品が多数の写本の中に転写されて現存している。ロマンスをめざしたのは、これが中世の文学作品では最も一般的なものと考えたからである。その中で自ら選んだのが *Ipomadon* である。中世ですでに(1300年頃)評判になっていたことが次の引用でもわかると思う。

I wole rede romaunce non
Off Pertenope, ne of Ipomadon,
Off Alisaunder, ne of Charlemayn,
Off Arthour, ne off Sere Gawayn,
Nor off Sere Launcelet-de-Lake,
Off Beffs, ne Gy, ne Sere Vrrake,
Ne off Ury, ne of Octauyan,
Ne off Hector, the strange man,
Off Jason, ne off Hercules,
Ne off Eneas, ne off Achylles.

(*Richard Coer de Lyon, 6725-34*)⁴⁾

通称 *Ipomadon* は中世後期のロマンスで、中英語作品としては3種 (versions) のテキストが現存し、幸いなことにその典拠となる Anglo-Norman の作品まで残っているものである。ただ、いまでもテキストが入手しにくい中英語版は前世紀の Eugen Kölbing 版 (Breslau, 1889) しかなく、W. H. French and C. B. Hale (eds.), *The Middle English Metrical Romances*, 2 vols. (New York, 1930), Vol. II, pp. 649-67, あるいは A. V. C. Schmidt and N. Jacobs (eds.), *Medieval English Romances, Part Two* (London, 1980), pp. 196-239 の選集で、*Ipomadon A* の一部を読むことしかできない。

Ipomadon に関する基本的な情報をえようとすれば、次の参考書を活用すればその手掛りがまずえられる。

J. Burke Severs (ed.), *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*, Vol. I: Romances (New Haven, 1967)

C. Brown and R. H. Robbins (eds.), *The Index of Middle English Verse* (New York, 1943) [以下 Index と略記]

H. L. D. Ward (ed.), *Catalogue of Romances in the Department of Manuscripts in the British Museum*, 3 vols. (London, 1883-1910)

Gisela Guddat-Figge (ed.), *Catalogue of Manuscripts Containing Middle English Romances* (München, 1976)

(a) 中英語写本

1. *Ipomadon* (*Ipomadon A*) Manchester, Chetham's Library MS Mun. A. 6.31 or 8009, fols. 191-335.

2. *The Lyfe of Ipomydon* (*Ipomadon B*) London, British Library MS Harley 2252, fols. 54-84.

3. *Ipomedon* (*Ipomadon C*) Warminster, Wilts, Longleat MS 257, fols. 90-106^v.

(b) 初期印刷本

1. [*The Life of Ipomydon*] 4^o. (Wynkyn de Worde, c. 1522). British Library, Bagford Ballads Collection, C. 40. m. 9. (18*). one leaf (ll. 261-320, ただし ll. 289-92を欠く). [STC 5732.5]⁵⁾

2. *The Life of Ipomydon* 4^o. (Wynkyn de Worde, c. 1527). [A] B-H.16 (lacks quire A). New York, Pierpont Morgan Library, 20896. ll. 1-192を欠くが, あとは完全。終りに 'Lenuoye of Robert C. the prynter' がある。[STC 5733]

(c) Hue de Rotelande, *Ipomédon* を含む Anglo-Norman 写本⁶⁾

A complete. BL MS Cotton Vespasian A. vii. s. xiii med., 107 fols. ff. 39-106. *Vision de St. Paul* を含む。

B complete. BL MS Egerton 2515. s. xiv in., 197 fols. ff. 3-70^v. *Protheselaus* と *Lancelot en prose* を含む。

C fragment. Oxford, Bodleian Library MS, Rawlinson Misc. D 913. s. xiv, f. 91^{r-v} (ll. 10171-10330).

D fragment. Dublin, Trinity College MS 523. s. xiv, 31 fols. (6048 lines).

E fragment. C. H. Livingston MS. s. xiv med. 342 lines (ll. 8504-8675 ; ll. 9362-9533).

以上の記述により、*Ipomadon* の中英語写本は 3 冊、初期印刷本は 2 種、典拠となる Anglo-Norman 写本は 5 冊である。そのなかで筆者が直接の研究対象にしているのは、*The Lyfe of Ipomydon* 関係のものである。

II 写本調査

写本を扱うには codicology, palaeography, textual criticism の基礎知識を必要としよう。初歩的なことは、イギリスの大学で写本を直接扱いながら学ぶのが一番よいであろう。本文校訂の関係ではまず書体 (script) が問題となろう。写本にたえず接していれば書体を覚えるのはさして難しいことではない。最初は、印刷された本文を脇に置いて参照しながら、直接写本から転写 (transcribe) するのが最もよい方法であろう。慣れてきたら脇にテキストを置かないこと。写本がなければ写真版を利用するほかない。転写の仕方も、写本に書いてあるとおりに、1 ページに one folio の recto あるいは verso を全部書き写してゆく。C. E. Wright, M. B. Parkes, N. Denholm-Young⁷⁾ などの参考書を利用していけば、そして現物の写本を多数扱っているかぎり、やがて書体、装飾、写本の体裁などを見ただけで、その写本のおおよその年代の判定ができるようになるだろう。要は慣れと実践である。

写真版から間接に、あるいは写本から直接転写したものは、1 ページに one folio の recto あるいは verso という形でタイプしておき、これを手許にある写真版 (facsimile or microfilm reproduction) を利用して注意深くチェックしておくこと。最終的には写本に当て確認する必要があることは言うまでもない。

また、写本に直接あたる場合注意すべき点は、その写本の中のある一部が必要な部分であろうが、その部分だけでなくその写本全体をよく観察することが大切である。いろいろ興味深いことが発見されたり、分ったりすることがよくあるからである。中英語の本文を含む 3 冊の写本について特徴的な点を指摘しておこう。

(1) 12-line tail-rhyme stanzas (aa¹b³cc¹b³dd¹b³ee¹b³) で書かれている *Ipomadon* の入っている Chetham's Library MS 8009 (s. xv ex.) は 372 fols. paper で出来ている分厚い物語集の写本であるが、内容的には宗教

的色彩が濃い。書体は、大体15世紀末の Anglicana book hands で、写字生 (scribes) は10名関係している。14篇の作品が筆写されており、Benedict Burgh, *Liber Catonis* などのほかに、ロマンスとして *Sir Torrente of Portyngale* (Index 983), *Bevys of Hampton* (Index 1993) について第10番目に *Ipomadon* (Index 2635) が入っている。そしてこの3篇が写本の大部分を占めている。

(2) Octosyllabic rhyming couplets で書かれている *The Lyfe of Ipomydon* (Index 2142) の入っている写本 BL MS Harley 2252 (s. xv ex.-xvii in.) は、167 fols. paper のもので、ロンドンの mercer 兼 bookseller である John Colyns が自ら作った commonplace book として知られている⁹⁾。素人づくりの写本としては Robert Thornton の Lincoln Cathedral Library MS 91 と BL MS Add. 31042 と比べられるよう。Harley 2252 は Colyns が1517年頃入手した2冊の booklets *Ipomydon* と *Le Morte Arthur* (Index 1994) (1460-80年頃専門の3 scribes によってロンドンの同じ workshop で筆写された) を母体として、その後1530年代後半まで Colyns とその協力者によって筆写された多数の実務的な項目、Lydgate, Henryson, Skelton の詩などから成り立っている。*Ipomydon* (fols. 54-84) と *Le Morte Arthur* (fols. 86-133^v) がこの写本の半分近くを占めていることがわかる。ff. 84^v-85 (fol. 85^v は blank) は Colyns が穴埋めをし、f. 83^v は別の写字生が何らかの理由で筆写しているが、ff. 54-101^v は scribe A, ff. 102-133^v は scribe B が15世紀後半の Secretary book hands で筆写している。16世紀末、Robert Farrer なる人物の書きこみから彼がこの写本を所有していたことがわかる。

(3) 散文の *Ipomedon* (ff. 90-106^v) (Prose Index 615)¹⁰⁾ の入っている Longleat MS 257 (1450-70) は ff. 212 (ff. 25 lost) の vellum で出来た立派なもので、本来全く別々だった2冊の合本である。主として2人の写字生が Anglicana 書体で筆写している。この写本には f. 98^v に 'tant Le Desieree R. Gloucestre' の記名があり、Richard III が国王になる1483年以前に書かれたものと思われる。写本の書きこみから Wydvil 家から Richard III の所有を経て、Marquesses of Bath のものとなったと推測されている。写本の前半には7作品が入っている。John Lydgate, *Sege of Thebes* (Index 3928), Chaucer, *The Knight's Tale* (*Arcite and Palamon*), Chaucer, *The Clerk's Tale* (*Grisild*), ついで *Ipomedon* と

なっている。貴族の教育をめざした本のように、写本の装飾などから地方の店の制作品と考えられている¹¹⁾。

ところで、筆者の edition 作成の際には、Early English Text Society (EETS) の記述方法をモデルとした。EETS の刊行本がわれわれの分野では歴史もあり、最も普及し最も信頼されているものだからである。誤植が全くないのは驚くべきことであり、校正には少くとも2年はかけているように思われる。とくに校訂本の本文に誤植があってはどのようななく、校訂本の価値を著しく低下させる。最近ではコンピューターが導入されている。

校訂本の本文作成にあたっては、どういう本文をつくるかが大きな問題である。中世英文学の作品の場合は、結局西洋古典文学や聖書研究の方法論の応用といってよいだろう¹²⁾。同一作品に複数の本文が存在するとき、どれを校訂本の底本にするか決めなければならない。これが一番難しい問題である。研究者は一般的に精確な本文を選んで使用する。ところが原典が今日まで伝来していることはきわめて稀なので、伝写本の研究によって「原典再建」が目標とされていた。しかし「本文批評」の規準をたてるのがなかなか難しく、事実上不可能であることが明確になった¹³⁾。共通の読みの誤りを基準としてステンマを建てて原典を推定する方法は、ある写本の本文の位置づけを知るには参考になるであろうが、それ以上のものではないであろう。今日ではどの写本も同じ価値をもった存在であるということに落ち着き、すべての本文を印刷本にして提示する方式をとっている。校訂者としては、できるだけ本文が良質で、原作者の書いたものにより近いと考える本文を提供するよう努力しているのが現状である。

校訂本の記述では、まずその写本そのものについて分るかぎりのことを客観的に記述しなければならない。そして取扱う本文の方言と時代(原作者と写字生)を決定しなければならない。写本に現われている方言は写字生(scribe)のことは・文章であることを銘記しておかなければならない。

Harley 2252 は紙の写本なので、写本そのもの・書体(script)・紙によっておおよその時期を推定することができる。紙の場合は「スカシ」(watermark)があるので、これを調べて参考にすることができる。1960

年代からは beta-radiography を利用することができるようになり、スカシもはっきり分るようになった。スカシを調べるには C. M. Briquet (ed.), *Les Filigranes*, 4 vols. (Leipzig, 1923) を利用することになるが、この事典も今では古くなってきているように思われる。

Ipomydon のテキストをつくる時、この作品の写本は 1 冊しかないので「原典再建」で悩むこともなく、写本の本文の原型を考えるうえで元のままの再現がよいと考え、できるだけ校訂者の手を入れない conservative な方針をとった。もっとも、明瞭な誤りは直した。写本から直接転写したものを使うのが普通であるが（それでも何回かチェックする必要がある）、マイクロフィルム reproduction をもとにしてテキストを作る場合は必ず写本に当たってチェックする必要がある。写真版はあくまでも写真版であり、写本は写本であり、それなりの大きな価値がある。校正にはたっぷり時間をかけ、幾度も写本あるいは写真版にあたってチェックしなければならない。

Harley 2252 のテキストには句読点 (punctuation) が全くなく、段落に相当すると思われる大文字が 10ヶ所 (ff. 54, 55^v, 57, 60, 61, 64, 68^v, 73, 74, 79) あるだけで、これも正確に言えば、大文字は記されてなく小文字の指示があるだけである。印刷本の de Worde's editions にも全く句読点はない。従って近代英語の文法に基く句読点を、よみやすくするため付けることになる。この点についてだけでも中世の文章と近代の文章の違いが感得される。実感としては近代的な句読点がない方が読みやすく、文章がうまく流れてゆくように思われる。句読点そのものに違いがあるようである。中世にも句読点そのものは存在していたので。

Ipomydon 第 1 巻の “Introduction” では「写本」のほかに「言語」だけを扱った。発音、スペリング、形態論、語彙を全般的に扱い、多少文体面にも触れた。音韻では E. J. Dobson と R. Jordan、文法では J. Wright、F. Mossé、T. F. Mustanoja、K. Brunner、J. Fisiak が大変役に立った¹⁴⁾。この研究の結論として、原作の時期は 15 世紀の中頃あるいは後半、方言は North-East Midlands を導きだすことができた。

Ⅲ 脚韻 (Rhyme)

難しい問題であるが、原作者の (authorial) 言語と写字生の (scribal)

言語を区別する必要がある。author (原作者) の言語の form は何か? Dobson 学派の史的音韻論では、韻文の脚韻 (rhyme) は正確に音 (sound) を合わせてあると基本的に考える。詩の作品の脚韻や頭韻 (alliteration) の部分は、写字生が十分注意して筆写した部分と考えられる。従ってその他の部分より手本 (exemplar) の本文をより忠実に伝えていると一般に考えてよいが、詳しく見てみると必ずしもそうとは言いきれないところがあるので問題が複雑になってくる。特に注意すべきは、基本的に写本のスペリング (spelling) は原作者の発音 (sound) を予想させるようなものではないこと、それは exemplar のスペリングと写字生自身のスペリングとが重なったものであること。現存する写本はあくまでもコピー (写し) であって、そこに現われるスペリングは原作者の書いたものままではないことである。それでも原作者のものを写してゆくのであるから、どこかに元の形が残されている可能性はある。その可能性が見られうる位置が脚韻である。作品そのものが目よりも耳に訴えて楽しまれた文学の時代である。そして多くの詩人が先人の残していった伝統的な組み合わせの脚韻をよく使ったという conventions がある。たとえ音が変わってもその組み合わせの単語のスペリングは変えずにそのままという場合が普通である。脚韻が合っていない inexact rhyme でも、一方の単語が写字生に分らなくて直しても、もう一方はそれに合わせて正さずそのままにしておく。スペリングが標準化されだしたのは15世紀なかばを過ぎてからであり、後期中英語時代はまだまだ各地の方言が生きていた時代でもある。詩人は彼の生きていた時代の、彼の知る限りの多くのタイプの発音を利用していたようである。そして脚韻に含まれる発音が古いとよく言われるが、新しい形に基く脚韻がなかなか使われれないという特徴がある。従って後期中英語時代は the great vowel shift がはじまっている時期ではあるが、スペリングが変らずそのままでありながら音の方が変化していつていることに注意しなければならない¹⁵⁾。

ここで例を引きながら説明を加えてゆくことにする。まず、原作者の発音のタイプは、脚韻に作者の意図していたものがあらわれていると考える。とくに John Gower などはその点で最も脚韻に意をもちいた詩人であるが、ロマンスや宗教劇のような作者になるとそれほどでもない。E. J. Dobson 学派の考え方による、脚韻の発音によって原作者の発音を

推定する方法を記述する。実例は *Ipomydon* より取る。

(実例) *there* (adv.) 1189 : *care* (sb.) 1190

この作品は short couplet 形式をとっていて、この2語が脚韻を合わせているわけであるが、ここでは inexact rhyme になっている。

1. 語源を調べる。文脈での品詞判定をし、*The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford, 1966) や *The Oxford English Dictionary* などを動員して調べる。

there < OE *þær* (æ), *þār(a)*, *þēr*

ストレスがかからない場合、母音が短くなる : *þær*, *þār*

-e を語尾につけるのは、副詞の語尾に -e をつけることから生じたアナロジーである。

ME *þære*, *þēre*

early ME から -e の形が出てくる。

care < OE *caru*

(語尾の -e は、OE の -u が弱音節にあったために生じた schwa。)

2. rhyme word として組み合わされている部分の発音の変化を調べる。

there の OE/æ/ > ME/e : / (non Saxon) or /ɛ : / (Saxon) → 方言による違い

OE/ā/ > ME/a : / (Northern) or /ɔ : / (non N) → 方言による違い

OE/æ/, ā/ > ME/a/ これも後に、13世紀はじめの open syllable lengthening の後に /a : / となる。

care の OE/a/ > ME/a/ これも後に、13世紀はじめの open syllable lengthening の後に /a/ となる。

3. 以上の調べによって、この両者の共通点は ME/a : / ということになるから、原作者はこの場合の脚韻の発音は ME/a : r/ のつもりで使用しただろうと推定する。いわゆる final-e の発音はきわめて微妙なのでここでは触れないが、一般的にいて後期中英語 (15世紀) になってからは発音されなくなっていただろうとだけ述べておく。

4. 従って、写本の文本の *there* は原作者の発音を示しているのではなく、むしろ多分写字生の発音であろうと推定できる。一般的にいえば、rhyme word 以外の場所では写字生自身のスペリングがよく現われているようである。

ところで、*there* について /a : / の音をもつ発音 (<thar(e)>/θa:r(ə)/)

は、ME では Northern または North-East Midland の特徴である。方言である。そこでおそらく16世紀初頭の Wynkyn de Worde's edition (PML本) では emendation をほどこしたのであろう。

MS For Goddis loue sayd Jason there

PML For Godes loue sayd Iason or ye hens fare

(アンダーラインは筆者)

PML 本では *care* (1.1190) はそのまま。'fare' は 2 人称複数 subj. の動詞。このように PML 本では *care* と発音 (ME/a:/ が open syllable にある) の一致する *fare* (<OE *faran*. OED, s. v. 'fare') を用いて、PML 本の compositor にはなじみの薄い /eɑ:r(ə)/ を排除したと考えられる。

一つの作品の脚韻にあらわれた発音の証拠が一つだけということはありえない。いくつも証拠は出てくるわけで、それらを核として作品全体に出てくる他の要素も参考にし、英語史の流れも考慮したうえで、最終的に創作年代と地方言を推定することになる。

IV スペリングに基く方言研究

ここでは Middle English Dialect Project として行われている研究のことを記述しておく。筆者の edition でも部分的に活用した。この方法は将来発展する可能性が大きいと考えるからである。1952年以來の成果は、*A Linguistic Atlas of Later Mediaeval English*, eds. Angus McIntosh, M. L. Samuels, and Michael Benskin, 4 vols. (Aberdeen U. P., 1987) として近刊される。これは簡単にいえば後期中英語方言地図集である。

1350-1450年に時期を限定し、中英語で書かれた約2000冊の写本や文書を資料として、2500人以上の写字生の成果を分析して、one scribe の特徴をスペリングから掴まえようとしているように思われる。この方式はスペリングを発音に読みかえることをしない。その基本的資料となる質問表を見るかぎり“Side I”については徹底的に調査すること、“Side II”については出来る程度において調査することが求められている。前者はMEのテキストでごく普通に出てくる forms で、*it*, *they*, *them*, *their*, *such*, *which*, *each*, *any*, *man*, *many*, *much* など27項目について調査する。後者は前者ほど普通に出てくるものではないが重要

な単語で, *she, her, if, though, yet, through, either ... or, or* など 23項目を調べる。同時に調査対象になった写本についての調査も期待されている。one scribe のスペリングを基本として調べあげた言語の forms を, 写本のなかでその言語の方言と年代が明確なものとを比較することによって問題の scribe の方言と年代を確定してゆく。そこに示されたものはあくまでも写本にあらわれている言語であること, つまり, 写本を写した写字生の言語であって, 必ずしも原作者の言語を反映しているかどうかよくわからないのである。また, 写字生がその特定された方言の場所で書いたかどうかともよく分らない。必然的に 'scribe' 個人に関する研究が盛んになっている¹⁶⁾。

Angus McIntosh, 'A New Approach to Middle English Dialectology,' *English Studies*, 44 (1963), 1-11がその口火をきった。個人としての写字生 (copyist scribe) が筆写するときの可能性を挙げている。

- (a) 写字生の使う exemplar のスペリングを忠実に写す。
- (b) exemplar のスペリングと写字生自身のスペリングを混ぜる。
- (c) exemplar を個人言語 (idiolect) に完全に「訳し」(translate) てしまう。

McIntosh はその後, この説を修正して, とくに北部の方言と南部の方言はお互いに分りにくいため, dialects 間の「訳」(translation) はごく普通みられる現象と述べ, 写字生が自分の言語 form とは違う方言の exemplar を使う場合の可能性として,

- (d) 言語を変えないでおく (稀な現象)
 - (e) 言語を自分の言語に convert する——これは綴り, morphology, 語彙も含めて変える (普通の現象)
 - (f) (d) と (e) の中間の作業をする (普通の現象)
- を提言している¹⁷⁾。

この McIntosh-Samuels dialect survey グループの M. Benshin と M. Laing は写字生のスペリングの repertoire は 2 種類であると述べている¹⁸⁾。すなわち,

1. 写字生がいつも使う方言の語形 (form)
2. exemplar に出てきたので写すとき使うが, 普通は使わない語形 (その語形が一般によく使われるので使用する)

従って一人の写字生が写すテキストに現われる語形は 2 種類と言っている

る。

- (1) 写字生の言語を反映したもの
- (2) 写字生の言語と exemplar に出てきた言語とが混合したもの
(Mischsprache)

写字生が2.の語形を繰り返し使っていると、それが1.の語形に次第に移ってゆく。こうして写字生の用語の repertoire の性質は、彼が写している写本の影響で変わってゆく。ただし、彼の書体 (script) は変ることがない。

M. L. Samuels は、次第に重要性を帯びてくる主たるロンドン英語のタイプを4種挙げている¹⁹⁾。

- Type I Central Midland Standard (s. xiv ex.-s. xv in. の Wycliffe 文献)
- Type II Auchinleck MS の Scribes 1 and 3 の言語 (1340-80)
- Type III Chaucer および Hoccleve の言語 (c. 1380-1420)
- Type IV Chancery Standard (政府公文書の言語, c. 1430以後)

その後、Samuels は15世紀末から16世紀はじめを問題とし、方言の特徴からテキストの地域判定の障害を指摘した²⁰⁾。それは標準化の方向が次第にとられ、local usage の使用が少なくなってゆくことである。そこで彼は二つの可能な過程 (同一テキスト内で単独あるいは複合して起りうる) を提示している。

(i) writer が自分の local forms を Chancery Standard の forms に直接かえた。

(ii) writer が広く使われている Chancery Standard でない他の forms にかえた。

15世紀も後半に入ると印刷術が出現して、事態は複雑になる。初期印刷本の場合、printer は作者のスベリングのあるものを保存し、他のものは自分のスベリングにかえてしまった。ただし、作者の provenance が詳しく分っていれば、どの forms が作者のもので、またどの forms が printer のものかは分る可能性がある。そこで Samuels はこの時期のテキストを理論上次の5種に分類している。

- Type A localizable dialect
- Type B Chancery Standard
- Type C Chancery Standard の forms を含む regional basis の writing
- Type D 'colourless' regional writing

Type E mixtures of regional spellings が入っているスペリング体系をもつ writing

それでも印刷本や写本に現われる London (City) English を考察するとき、問題のこの時期の言語はきわめて複雑な状態におかれていることに注目しなければならない。Samuels はこの時期のテキスト校訂者に対して、次のような可能性がいくつもからみ合っている点を指摘し、警告を発している。

1. variation の基が regional のままであり、大都会の場合階級のものでありうる。
2. もともと regional variants であったものがそれを単に写しただけの writers によって結合してしまう。
3. 1 あるいは 2, またはその両者と printer のスペリング体系とが混合してしまう。
4. printer のスペリング体系は、それ自体混合タイプであるか標準タイプである。

Samuels のこの論文は1450年以後の印刷本や写本を扱う場合、スペリングと morphology に基くこのグループの分析方法の困難を表明しているように思われる。

V. 初期印刷本

初期印刷本は普通 *incunabula* と呼ばれ、1500年までの現存刊本を主たる対象としているが、それ以後も中世の作品が印刷されているので、1550年頃までに出版されたものを含むべきであろう。この種の研究には bibliography の基礎知識が必須であろう。その全貌は *The New Cambridge Bibliography of English Literature*, ed. George Watson, 4 vols. (Cambridge, 1974) : Vol. I 'The Renaissance to the Restoration (1500-1600),' III. Book Production and Distribution. cols. 925-1006 が参考になる。案内書としては Philips Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* (Oxford, 1972) が一番よい。イギリスの Bibliographical Society Publications がきわめて重要であり、その機関誌 *The Library* (London, 1889-) および年鑑本の *Studies in Bibliography* (Charlottesville, Va. 1948-) に掲載されている諸論文が大切である。

現存している初期印刷本についての基本的情報を掴む手掛りはSTCである。すなわち、*A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, & Ireland and of English Books Printed Abroad 1475-1640*, eds. A. W. Pollard & G. R. Redgrave; 2nd edn., W. A. Jackson, F. S. Ferguson, and K. F. Pantzer, Vol. I: A-H (London, 1986), Vol. II: I-Z (London, 1976)である。

Ipomydon の印刷本2種については、カタログを調べるといずれもFragment(断片)と出ているのでしばらく除外視していた。2種ともWynkyn de Worde印刷のもので、BL本(STC 5732. 5)は1522年頃、PML本(STC 5733)は1530-31年頃となっていたがSTCの新版では後者は1527年頃と早くなっている。出版年代はtitle-page(1494年頃より現われる)、序文、colophon、さらには紙と活字(type)によって確定される。初期印刷本は外見上それまでの写本をそのままそっくり活字におきなおしたのと言ってよいだろう。最近では赤外線をかけたり、beta-radiographで紙の「スカシ」(watermark)が明瞭に見られるようになっていたり、初期刊本の研究が着実に進んでいる。15世紀文学研究が目下盛んであることがその背景にある。

とりあえずBritish Library, C. 40. m. 9. (18*)の1枚(表と裏)の写真を入手してみた。Harley 2252の本文と較べてみると、そのll. 261-320(ただしll. 289-92を除く)とほぼそっくりなので第1巻のappendixとして付加した。1枚の印刷物の上端が切りとられているのはその後気付いたことで、1ページに韻文32行が印刷されているので、表で4行、裏で4行欠けていることになる。中世の文字‘p’が消えていること、rhyme-wordsが整えられていること、古い言葉がおきかえられているのが印象的であった。PML本もmicrofilm reproductionを基にして転写してあったものを現物に当てチェックした。第1巻を刊行してからSheffield大学のNorman F. Blakeより2度にわたって私信をいただき、とくにCarol M. Meale, “Wynkyn de Worde’s Setting-Copy for *Ipomydon*,” *Studies in Bibliography*, 35 (1982), pp. 156-71を見なければいけないと注意された²¹⁾。この論文はCarol MealeのPh. D. 論文(York, 1984)の中で最も重要な部分を要約したものである²²⁾。改めてPML本をよく調べてみると、Harley 2252のテキストの出だしll. 1-192(quire A)だけが欠落して、その後の本文は2346行の最後行までピッタリ一致

した。そこで初期印刷本によるテキストを第2巻として刊行することにした。従って第2巻“Introduction”の記述は前著より簡略化し、とくに3種のテキストの比較の部分はCarol Mealeの研究を意識して書いたものである。大部分はPML本の言語の記述である。

第2巻は2種類の現存するWynkyn de Worde's editionsの本文を提示することであったが、PML本は実質的に協力者Robert Coplandの仕事ではないかと推測している。PML本の末尾に“Lenuoye of Robert C. the prynter”がある。Robert Coplandは“my mayster”と呼ぶWynkyn de Wordeの文学上の助言者で、翻訳者としてもよく知られており、彼が関係した印刷本には必ずといってよいほどintroductionやenvoyの類をよく書いている。この2人の密接な関係について注目している。「言語」の記述については、すでに16世紀初頭のロンドン英語なので、詳しく書くことは避け、Harley MSのテキストと比較して著しく違っている特徴的をしばった。BL本およびPML本の言語の特徴を記述したといった方がよいだろう。“edition”といわれているように、編者あるいはcompositorないしcorrectorの手が入っていることは、Harley MSに多数見られる黒インクによる訂正がほとんどそのまま印刷本で生かされていることで分る。組版(forme)の直しはcompositorとcorrector2人が直し、小さな印刷所ではmasterあるいはsenior journeymanが行ったといわれている²³⁾。この直しの点では、1枚のBL本だけの証明では十分といえないが、筆者の調べた限りでは2度修正が行われたように思われる。そして黒インクのcorrectorはRobert Coplandではないかと推定している。このように写本と初期印刷本の本文比較ができたので、MSのテキストを原型に近い形で残したことが偶然生きたことになった。

第2巻の「言語」記述でとりわけ気付いた諸点を以下に挙げておく。rhyme-wordsは出来るかぎり合うように直されている。rhyme-wordのスペリングも出来るだけ同じように合わせてある。スペリングそのものも印刷術の影響で近代英語に近い形を示し、同一語のスペリングは大体において同一であることも実際に分った。いわゆるfinal-eは、あまり意味がなく付いている場合がかなりあるように思われる。中世の文字の<þ>は全く消え、<ȝ>は1例あるのみ。複雑だった代名詞、とくに3人称複数形は*they*, *theyr*, *them*と単一になり、動詞3人称単数現在形の語尾はほとんど-thに統一されている。文体の面では、MSによく

見られた *gan-periphrasis* (*do* の使われている場合もあったが) が、印刷本では圧倒的に *dyde* 形にかえられているのが印象的であった。*dyde* + infinitive の形で、*rhyme* 形成によく使われている。本文の句読点については、216 (B₁^v), 444 (B₁^v), 528 (C₂^v), 548 (C₂^v), 750 (D₁^v) の各行末にピリオドがある以外、全くない。

また、MS 対 BL and PML の本文比較、印刷本の BL 対 PML の本文比較も試みた。それぞれの場合、編者あるいは corrector or compositor の手が入っていることが部分的ながらも実証することができたと思う。このようにして印刷本が刊行されることによって英語のスペリングが統一され、固定化されてゆく現状をまざまざと見ることができた。発音の方は *great vowel shift* の時代であり、大きな変化が起っていて、スペリングが固定化してゆくので綴り字が発音をあらわさなくなつてゆく方向にむかう。

初期印刷本の時期は通常1500年頃までとされているが、中世の作品が16世紀初頭においても出版されているので1550年頃までの印刷本を考慮に入れる必要があるだろう。William Caxton からはじまったイギリスの印刷・出版業はその後 Wynkyn de Worde, Richard Pynson など外国出身の印刷業者に引継がれ発展してゆく。Caxton は約100点(同一本の再版を含めて)を印刷したが、印刷物はフランドルの宮廷文化を反映している。そして Chaucer, Gower, Lydgate, Malory, *Golden Legend* などの文学の重要性を定着させた。Caxton の直弟子 Wynkyn de Worde は師の死後1491年独立し、のち Fleet Street に移り1535年に死ぬまで約800点印刷している。宗教作品が主ではあるが、文法書を多数印刷し印刷物を普及させた人物と言われている。文学作品も Chaucer, Lydgate, S. Hawes, *Le morte Darthur* などのほかにロマンスも15点印刷している。ノルマンディ出身の Richard Pynson は印刷技術がよく印刷物の質がきわめて高い。法律書の印刷が多く、1508年 king's printer になってからは公文書印刷が多くなる。文学書も Chaucer, S. Brant's *shyp of folys* (tr. A. Barclay), Froissart's *cronycles of Englande, Fraunce* (tr. J. Bouchier, Lord Berners) などを印刷している²⁴⁾。de Worde と Pynson の2人は1490年代から1530年代中頃まで英国の印刷業界を支配した巨人である。すぐれた大陸製の印刷本に並行して、イギリスの印刷業は国家の保護を受けながら発展していった。このような分野の研究もわれわれと

しては見逃すことはできないであろう。

注

- 1) Carol M. Meale の最初の論文で, “Wynkyn de Worde's Setting-Copy for *Ipomydon*,” *Studies in Bibliography*, 35 (1982), pp. 156-71.
- 2) 本論は1985年7月23日, 広島英語研究会(広島大学)で講演した原稿をもとに加筆訂正をほどこしたものである。
- 3) たとえば, Derek Pearsall, “Editing Medieval Texts : Some Developments and Some Problems”, in *Textual Criticism and Literary Interpretation*, ed. Jerome J. McGann (Chicago, 1985), pp. 92-106 参照。
- 4) Karl Brunner, *Der me Versroman über Richard Löwenherz* (Wien und Leipzig, 1913) より引用。
- 5) STC については, 後述の“V. 初期印刷本”の冒頭部分を参照。
- 6) A. J. Holden (ed), *Ipomedon* (Paris, 1979), pp. 16-18. なお, A, B, C については筆者自身調査した。
- 7) N. Denholm-Young, *Handwriting in England and Wales* (Cardiff, 1954); C. E. Wright, *English Vernacular Hands from the Twelfth to the Fifteenth Centuries* (Oxford, 1960); M. B. Parkes, *English Cursive Book Hands 1250-1500* (Oxford, 1969); その他最近出版されている facsimile editions.
- 8) Carleton Brown and Rossell Hope Robbins (eds.), *The Index of Middle English Verse* (New York, 1943).
- 9) Carol M. Meale, “The Compiler at Work : John Colyns and BL MS Harley 2252,” in *Manuscripts and Readers in Fifteenth-Century England*, ed. Derek Pearsall (Cambridge, 1983), pp. 82-103 ; Pamela R. Robinson, *A Study of Some Aspects of Transmission of English Verse Texts in Late Mediaeval Manuscripts* (unpublished B. Litt. thesis, Oxford, 1972).
- 10) R. E. Lewis, N. F. Blake, A. S. G. Edwards (eds.), *Index of Printed Middle English Prose* (New York, 1985).
- 11) Carol M. Meale, “The Middle English Romance of *Ipomedon* : a Late Medieval ‘Mirror’ for Princes and Merchants,” *Reading Medieval Studies*, x(1984), pp. 136-91.
- 12) John E. Sandys, *A History of Classical Scholarship* (rpt. ed., New York,

- 1958) ; Rudolf Pfeiffer, *History of Classical Scholarship from 1300 to 1850* (Oxford, 1976).
- 13) W. W. Greg, *The Calculus of Variants* (Oxford, 1927); Fredson Bowers, *Bibliography and Textual Criticism* (Oxford, 1964) ; F. Bowers, "Multiple Authority : New Problems and Concepts of Copy-Text," *Library*, 5th ser. 27 (1972), pp. 81 — 115, and "Greg's 'Rationale of Copy-Text' Revisited," *Studies in Bibliography*, 31 (1978), pp. 90 — 161 ; James Thorpe, *Principles of Textual Criticism* (San Marino, Cal., 1972); M. L. West, *Textual Criticism and Editorial Technique* (Stuttgart, 1973) ; 阿部秋生『源氏物語の本文』(岩波書店, 1986).
- 14) E. J. Dobson, *English Pronunciation 1500-1700*, 2nd edn., 2 vols. (Oxford, 1986); Richard Jordan, *Handbook of Middle English Grammar : Phonology*, tr. and rev. E. J. Crook (The Hague and Paris, 1974); Tauno F. Mustanoja, *A Middle English Syntax, Part I : Parts of Speech* (Helsinki, 1960); J. Wright and E. J. Wright, *An Elementary Middle English Grammar*, 2nd edn., rpt. (Oxford, 1962) ; F. Mossé, *A Handbook of Middle English*, tr. J. A. Walker (Baltimore, 1961); K. Brunner, *An Outline of Middle English Grammar*, tr. G. K. W. Johnston (Oxford, 1963); J. Fisiak, *A Short Grammar of Middle English : Part One* (Warsaw and Oxford, 1968); E. Ekwall, *A History of Modern English Sounds and Morphology*. tr. A. Ward (Oxford, 1975).
- 15) 池上昌「中英語のライムとスベリング」慶応大学『教養論集』69号 (1985), pp. 193—212.
- 16) Middle English Dialect Project のグループとは違うが, 最も重要な論文は A. I. Doyle and M. B. Parkes, "The Production of Copies of the *Canterbury Tales* and the *Confessio Amantis* in the Early Fifteenth Century," in *Medieval Scribes, Manuscripts and Libraries : Essays presented to N. R. Ker*, eds. M. B. Parkes and A. G. Watson (London, 1978), pp. 163—210である。
- 17) A. McIntosh, "Word geography in the lexicography of medieval English," *Annals of the New York Academy of Sciences*, 211 (1973), pp. 55—66.
- 18) Michael Benskin and Margaret Laing, "Translation and *Mischsprachen* in Middle English manuscripts," in *So meny people longages and tonges*, eds. M. Benskin and M. L. Samuels (Edinburgh, 1981), pp. 55—106 ; Jeremy J. Smith, "Linguistic Features of some Fifteenth-Century Middle English Manuscripts,"

in *Manuscripts and Readers in Fifteenth-Century England*, ed. Derek Pearsall (Cambridge, 1983), pp. 104–112.

- 19) M. L. Samuels, "Some applications of Middle English dialectology," *English Studies*, 44 (1963), pp. 81–94.
- 20) M. L. Samuels, "Spelling and Dialect in the Late and Post-Middle English Periods," in *So meny people longages and tonges*, eds. M. Benskin and M. L. Samuels (Edinburgh, 1981), pp. 43–54.
- 21) この論文の要旨は、写本自体の詳しい調査から *Ipomydon* (Wynkyn de Worde's edition) 印刷に当ってMS Harley 2252が setting-copy として使われたことを実証したものである。
- 22) Carol M. Meale 論文の源は、*The Social and Literary Contexts of a Late Medieval Manuscript : A Study of BL MS Harley 2252 and Its Owner, John Colyns*, 2 vols. (unpublished D. Phil. dissertation, York, 1984) である。
- 23) Philip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography* (Oxford, 1972), p. 111.
- 24) Henry R. Plomer, *Wynkyn de Worde and His Contemporaries* (London, 1925); H. S. Bennett, *English Books and Readers 1475-1557* (Cambridge, 1952); Norman F. Blake, "Wynkyn de Worde : The Early Years," *Gutenberg Jahrbuch*, 1971, pp. 62–69 and "Wynkyn de Worde : The Later Years," *Gutenberg Jahrbuch*, 1972, pp. 128–38 ; J. Moran, *Wynkyn de Worde* (London, 1960).

(本論文は昭和61年度成城大学特別研究助成『英米文化と日本』の研究成果として発表するものである。)